
基本科目・専門支持科目

報告者：山城 綾子

教育及び実践の課題

近年、中学、高校、大学の英語教育に関連して多読の取り組みが注目されている。多読とは多くの本を読むことであり、英国や米国の幼稚園や小学校では、多読用図書教材が豊富に用意され、その取り組みが学校を始めとし、家庭や地域の図書館まで広く行われ浸透している。日本の英語教育では Leveled Books や Graded Readers、Children's Books 等を組み合わせて段階的に多読用図書教材を読んでいく取り組みが 1980 年代から広がっている。多読を英語教育の中に取り入れるためには、多読用図書教材収集及び費用と管理体制、多読指導人材養成環境を整備する必要がある、それらへの理解と時間と労力を要する。学生の英語への関心を高め英語の世界の広がりを実感できるよう実際の教育実践例から学び、本学で取り組める要素を考える。

活用した論文の概要

Widodo(2008)の文献は、米国インディアナ郡ペンシルヴェニア州立インディアナ大学の語学学校で多読の取り組みを中心に行っている ESL(English as a Second Language)クラスの授業観察を通して、多読の利点を挙げ、ESL 教室での多読の取り組みが EFL(English as a Foreign Language)教室の環境で実施する上で指針となることを目的としている。

クラスでは主にリーディングとスピーキングの技能で多読に焦点を当て、授業観察では次の 8 項目の活動に注目している。(1) 授業導入、(2) 自発的学習決定の学生自身の気づき、(3) 指導者の土台、(4) 学習速度の学生自身の気づき、(5) 多様な読みによる学生の能力強化、(6) 学生と指導者の活発な相互作用、(7) 教室内相互作用から生じる質問の性質、(8) 観察のルール、である。各項目の分析から、多読活動は学生の読書の喜びを教室内外で促進し、意味を理解するために読み、黙読を継続させ、自律的で自主的な読書に導くことが分かった。最も大切なことは、多読は学生が読書と自身の人生を結びつけて熱心な読書家になることを促し、その過程で知識または概念の一部として新しい情報を創り出すということである。

教育及び実践への活用

近年、日本でも多読や多聴が英語学習方法として注目されている。本文献は米国の実践を知ることで、その多読活動を EFL クラスへ導入する際に参考となる。多読活動を通して、口語表現と発表能力、文語表現を学び鍛えていく。表現能力以外にも、多読用図書教材を通して日常的な生活習慣や文化を学ぶことが可能であり、EFL の環境では想像力や理解力が求められる文化を学ぶ教材としても優れている。Wadodo(2008)は学生へ多読活動を促すことで、大学生の期間中だけではなく、生涯学習へ繋がる指導を示唆している。更に蓄えた知識や概念の一部として自ら創造する力を養う重要性を指摘している。本学での導入には多読用図書教材の収集費用や管理体制、多読指導人材養成環境の整備等課題が山積している。しかし、多読用図書教材の収集を地道に行い、学生へより良い多読学習環境の提供を検討したい。

参考文献

Widodo, P. H.(2008). Extensive reading in an ESL class in the United States: Some good points. Reflections on English Language Teaching 7(1), 71-76.
